

緊急搬送データが語ることは？

日本エマージェンシーアシスタンス株式会社
のむらてつじ
営業部 部長 野村哲資

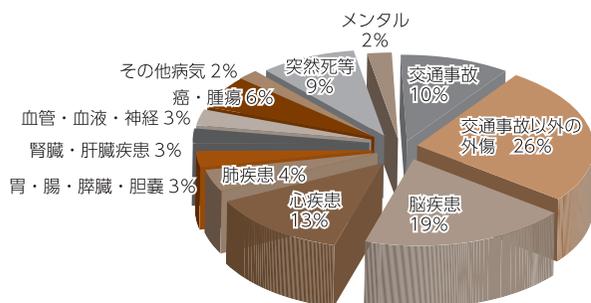
近年、医学の進歩に伴い救命率が格段に向上している。一方で、救命率を高めるためには時間が大きなカギを握っており、「緊急搬送」の重要性はますます高まっている。特に海外においては、現地の医療レベルに大きな格差があることから、日本に「緊急医療搬送」する必要があることも多い。そこで本稿では、今回の特集テーマを考えるにあたり、当社で扱った海外関連の搬送データから医療搬送となる疾患を分析し、その傾向を探った。

40%が交通事故を含めた外傷

当社では新生児から90歳を超えた高齢者まで数多くの搬送を行っているが、ここでは2010年1月1日～14年8月29日の間に実施した513件の搬送データの分析を行った（グラフ「搬送となる疾患分析」）。対象は、①医療搬送・遺体搬送・現地茶毘のケース、②年齢は25歳から64歳までの現役世代。

このグラフからは以下の特徴が読み取れる。
①交通事故を含めた外傷が全体の40%弱。交通事故以外のけがは、転倒や転落による骨折、捻挫や死亡、火傷、溺死等である。②疾病では脳梗塞、

グラフ「搬送となる疾患分析」



くも膜下出血等の脳疾患が19%、心筋梗塞などの心疾患が13%。③突然死等は部屋で亡くなっていた等で、脳梗塞や心筋梗塞の疑いもある。④自殺を含むメンタル事案も12件（2%）発生。

年齢別に見ると年齢が上がるに従い脳疾患・心疾患の割合が増え、日本人の3大死因であるがん、心筋梗塞、脳卒中と似た傾向を示している。つまり、20代や30代は交通事故を含む外傷が脳疾患、心疾患より多く、40歳以上になると外傷より脳疾患、心疾患が増える。性別面では、女性より男性の方が脳疾患、心疾患で搬送されているケースが多い。

最新機器を使いこなせない病院も

注意すべきこととして、中国を含むアジアやアフリカ新興国の医療機関では最新の医療機器を導入しても使いこなせる人材が育っていない場合も多い（特に超音波、X線、CT、MRIなどの画像診断における読影能力）。そのことを示す事例として以下のようなケースが発生している。

【事例】

31歳男性がシンガポールで健康診断を受けたところ、「悪性肺病変、早期に病変摘出を勧める」との診断結果が出て当社に相談があり、がん研有明病院による受診を推薦した。男性はすぐに帰国し精密検査を受けたところ、結果は「悪性」ではなく「良性」で、至急の手術は必要なく、次回一時帰国時（8カ月後）の摘出で良いとのことであった。X線・CT・MRIによる画像読影には高度な読影や診断能力が求められ、時として診断ミスも起きやすい。経験豊富な日本人専門医による